幼児の教育　第95巻　第４号　平成８年４月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

'96 4月号

家庭―保育所―幼稚園

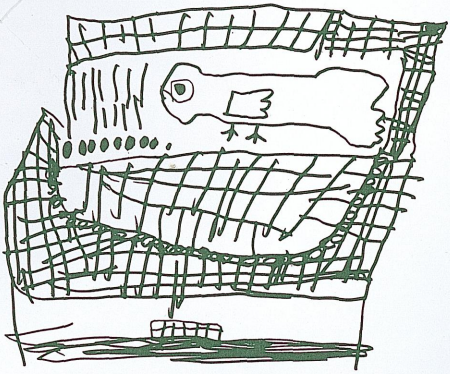
お茶の水女子大学 平成 8. 4. 9 附属図書館

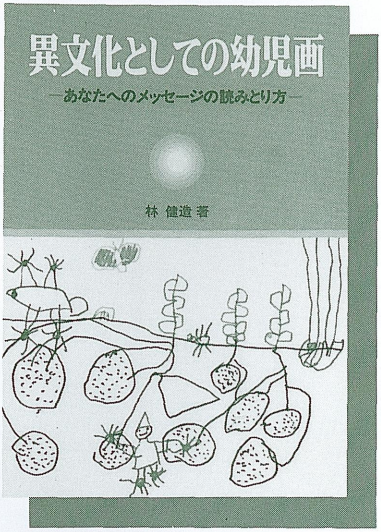
第95巻　第４号　日本幼稚園協会

異文化としての幼児画
―あなたへのメッセージの読みとり方―

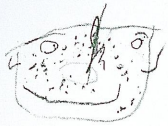
幼児の絵は特別の意味をもっています。それはあなたへのメッセージでもあります。幼児の表現を読み取ることが大切です。それを理解することによって適切な援助の仕方がわかってきます。

新刊





- 幼児の生きた造形表現がわかります。
- 発達による絵の読み取り方がわかります。
- 実際の造形表現の援助の仕方がわかります。
- 現職の園長としての保育譚(はなし)を楽しみながら保育の心が身についていきます。



林　健造・著

A5判・168頁・定価1,500円(本体1,456円)

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

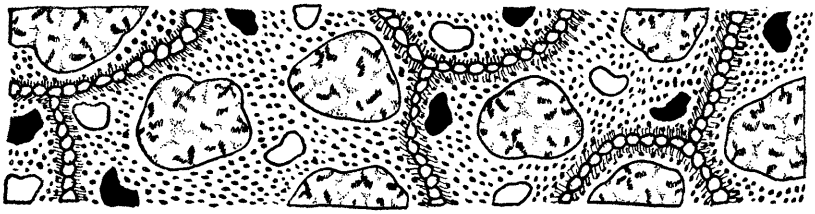
第95巻　第４号

幼児の教育　目次

――第九十五巻　第四号――

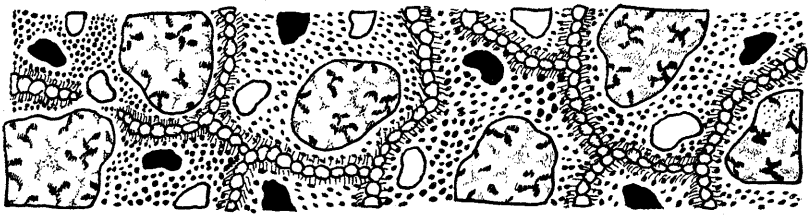
二十一世紀にむけて幼児教育を考える(1)
保育における新と真を問う……森上　史朗…（4）
エレン・ケイ『児童の世紀』を読む
―未来への意志を育てること―……津守　真…（7）
震災後の子どもたち(7)
若者が深呼吸できる場――ちびくろテント村……村井　雅清…（12）
開発途上国での保育による国際協力
―スリランカにおける青年海外協力隊幼稚園教諭の活動―…前田美知子…（16）
ある日の育児日記から(64)……佐藤　和代…（25）

© 1996
日本幼稚園協会



保育者が自分の価値観を見つめ直すために……田代　和美…（26）
共に楽しむということ……永田　陽子…（33）
トポスにおける発達　第七回
身体性の変容――運動会におけるからだの意味……無藤　隆…（38）
保育の窓(1)　保育の技術(1)　遊び……原口　純子…（47）
あんよ、いたいの？……並木美砂子…（56）
『十里霧中』番外編　―イギリスの畑の横に暮らして―……豊田　一秀…（61）

表紙絵・いわむらかずお（「なにかありそうだ」）
扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ（「春の庭」）
編集委員・田代　和美／桝田　正子・伊集院理子
編集部・仲　明子



二十一世紀にむけて幼児教育を考える(1)

保育における新と真を問う

森上　史朗

あと四年ほどで二十世紀は終ろうとしていますが、幼児や幼児教育にとっては今世紀はどのような時代だったのでしょうか。倉橋惣三は一九一一（明治四十四）年に雑誌『小学校』に寄稿した論文の中で、二十世紀は〝児童の世紀〟と叫ばれる趨勢の中で、それを喜ぶとともに、一方でその実現を図るには数多くの困難があり、その打開に向けて努力を重ねる必要があることを力説しています。

そこで倉橋が今世紀は〝児童の世紀〟であると記したように、一九〇〇年にはエレン・ケイが『児童の世紀』を著しており、その前年には、

デューイが進歩主義教育のバイブルとされた『学校と社会』を公刊しています。

一方、わが国では一九〇一年に女子高等師範助教授兼幼稚園批評係であった東基吉らの手によって、本誌の前身である『婦人と子ども』が創刊されています。これは一九一二年には倉橋が編集主任を引き継ぎ、その後、『幼児教育』と改題されました（一九一九年）。彼はこの雑誌や日本幼稚園協会の講習会などを通じて、児童中心の保育を実現することに全力を注いだのです。

しかし、エレン・ケイ以降、内外における数多くの児童中心教育の提唱者たちの努力にもかかわらず、二十世紀が終ろうとしている現在においても、〝児童の世紀〟は十分に実を結んでいるとはいえない状況にあります。今、この瞬間にも民族紛争は絶えず、多くの子どもたちは傷つき、また飢餓の中にあります。わが国も経済大国、教育大国を謳歌しながら、子どもから自然や遊び場は奪われ、人の心をつなぎ合わせるコミュニティーは崩壊し、親たちは孤立して子育てをすることを余儀なくされています。また、子どもたちは遊ぶ暇はなく、早期からの教育にかりたてられる状況にあります。さらに、学校は競争の場となり、いじめ、自殺、不登校などの病理現象が進行しつつあります。

こうした現在の社会の状況をみるとき、今の状況をとらえた新しい〝児童の世紀〟、〝児童中心の保育〟を創り出す努力を始めなくてはならないと思うのです。そのため、文部省では、〝地域に開かれた新しい幼稚園の在り方〟をさぐる先導的研究を各都道府県に委嘱して始めていますし、厚生省も現在の保育要求の多様化に即する特別保育対策に力を注いでいます。それは、幼稚園や保育園がこれまでの固定概念を固守したのでは、今の子

どもに即する保育を実現することにはならないという認識があるからでしょう。

しかし、こうした場合においても忘れてはならない重要な原則があります。それは、変わるものに目を向けながらも、その底にあって変わらない、〝子どもの本質〟、〝保育の本質〟が存在しているということを見逃さないことです。倉橋惣三の著作の中にもそのことについてふれた箇所が数多くあります。たとえば、『新しい新を怠ってはならぬが、古い新も忘れてはならぬ。といって『世に新しきものあるなし』との古語にさとりを開いてしまうわけではないが、真に通ずる新は、古いものの中にあっても永遠の輝きを失わない」とか、「教育にそう新が得られるわけではない。千古永劫の真こそとうといのである」などがその例です。これからすると、現在、政府が進めている〝エンゼルプラン〟や〝駅型保育〟なども〝保育の真〟との関連において検討されることが必要になる筈です。

私は現在、倉橋惣三が保育以外の分野の雑誌に執筆した論文を集めて、『倉橋惣三選集第五巻』（津守真監修・森上史朗編）を編集中です。それらの論文の多くは、明治から大正にかけて執筆されたものです。この選集のまえがきで、津守真氏は、「いま、この第五巻で、今世紀初頭の倉橋の主張を明瞭に読むことができる。それは今世紀前半に必要なことであったし、この二十世紀の終わりにもまた必要なことである」と述べておられますが、真に通じる新を創造することが今、われわれに求められているといってもよいのではないでしょうか。

（日本女子大学）

エレン・ケイ『児童の世紀』を読む

―未来への意志を育てること―

津守　真

あと数年で二十世紀は終わろうとしている。

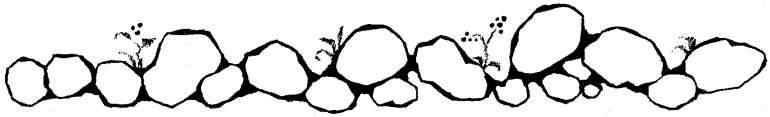
今世紀のはじめ、スウェーデンの教育者であり、女性解放運動家であったエレン・ケイは、『児童の世紀』という表題の書物を著し、それは忽ち数か国に翻訳された。日本でも大正のはじめに翻訳されている。

私自身、二十世紀前半に生まれて、子ども時代を過ごし、二十世紀後半に子どもの研究を専門として仕事をしてきた。私共の社会は、その前半に第二次世界大戦・敗戦

という大きな転換期があったが、後半は平和を享受した。その中に身をおいて子どもの仕事をしてきた私は、子どもにとっては決して幸せとは言い切れない時代だったと考えている。むしろ子どものことを専門とする故に厳しく見えてきたことがいくつもあった。科学を根拠にして子どもの遊びは侵害され、子どもの住環境、遊び場の自然は破壊され、遊ぶ時間は減少した。それは一九六〇年代にはじまった。そして最近は子どもの自殺にまで至るいたましい事実がひろがっている。世界に目を向けると、いまだに子どもが戦争、貧困の犠牲者である。二十世紀は「児童の世紀」どころではない。世界史の中でもこれほどにひろく子どもが人為的な理由で苦しんだ時代は少なかったのではないか。そういう時代だからこそか、「子どもの権利条約」は世界の国々に公的に承認され、ＯＭＥＰ世界大会にも見られたように、こどもの側に立って仕事をし、主張する人々が数多くいるのも世界的事実である。

エレン・ケイは「児童の世紀」と言って何を主張したのか。この児童の世紀の終わりにあたって、もう一度これを読み直してみることは意義あることと思う。

その冒頭に彼女は「未来への意志」の力が子どもの本性の中に隠されており、子どものあらゆるいたずらには善を生み出す、こわれることのない種が含まれていると述べて、ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』から引用する。



「あなたがたがこの小さきもののひとりのようにならなければ、と人類の師（イエス）は言われた。われわれと対等の人間を、われわれは自分たちを手本にして形作ろうと考え、思うままに教育訓練の対象（subject）として扱っている。彼らは自分自身の意志をもたないのか。それならば我々も自分の意志をもたないのか。大人のすぐれている点は何なのか。われわれが年長であり経験を多く持っている事実なのか。ああ、天の神は年長者も幼い者も等しく見給い、幼い者をより多く喜ばれる。イエスは何世紀も前にそう言われた。しかし、人々は神を信じると口で言いながら、神に聞こうとしない。これは昔からのトラブルのもとだった。彼らは子どもたちを自分と同じ形に型どろうとす」と。

未来を創りだそうとする意志を子どもの中に育てることは、エレン・ケイが繰り返し述べるテーマである。私はこれを読んで、いまも私共は同じ課題を背負っていることを思った。未来を作ることは自分とは関係がないと考えるから子どもが自殺するのだろう。幼い子どもにとっての未来は、時間的には一日の中のことである。遊びは一瞬先の未来を自分の意志で創り出す行為である。遊ぶ時間のない現代の子どもたちは、彼女の言う「未来への意志」を失っているのではないか。二十世紀の初めに主張されたことは、現代も一層課題であり続けている。

他方、私の周囲の多くの若者たちが、この時代にも自分の未来を望み見て生きているのも事実である。「児童の世紀」の気運は、二十世紀前半の新教育運動を生み出

し、既に壮年から老年のかなりの人々がその影響を受けて若い時代を過ごした。そしてその影響力は広い範囲で私共の時代に引き継がれた。私がかかわってきた保育の実践の場も、その一環である。

しかしエレン・ケイも言うように、美しく進歩的な言葉が語られても実際は古いままである。その点も二十世紀初めと終わりとでは変わらない。

彼女は言う。「彼らは、進化、個性、自然の傾向を口にする。しかし、自分が信じていると言う新しい教えを真剣に考えない。悪は悪によって駆逐されねばならないと考える。」

エレン・ケイはさらに次のように述べる。これを読むと全く新鮮で、いまに通用する言説が多い。しばらく彼女の説くところに耳を傾けてみよう。

「新しい教育は、自然が静かにゆっくりと働くことを助ける。

新しい教育は、子どもを取り巻く環境条件が自然の業を助けるように注意を払う。

これが教育である。」

「子どもの真のパーソナリティを抑圧して、他のパーソナリティをもって代えることは、教育学的犯罪である。彼らは悪が善に変えられる可能性を信じていない。この段階に到達するときに教育は科学と芸術になり始める。」

「魂の本性を破壊することはできない。ここに二つの可能性がある。服従させるか、

より高い次元に高めるか。」

「子どもと遊ぶことのできる人のみが子どもを教育することができる。その訓練の第一条件は、子ども自身になることである。それは子どもっぽくなることではない。それは子どもでも望まない。子どもが生きた活動に夢中になっているように、子どものところにまで引き上げられることである。子どもを全く自分と対等の者であると考え、大人に対すると同様の配慮と親切な信頼を寄せることである。大人が望むように子どもに影響を与えるのではなく、子ども自身があるがままの印象によって大人が影響されること、子どもを欺瞞と強制によって扱うのでなく、誠実さとまじめさをもって接することである。」

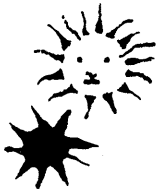
エレン・ケイの言う「未来への意志」は、理念や理想ではなく、子どもの現実をみる者の主張である。彼女は世紀の終わりを見ていないのであるが、それは時代を超えて通用することを心の底で信じていたのではなかろうか。現代の教育においても、個々の能力の養成よりも「未来への意志」を子どもの中に育てることこそが最優先の課題である。

（愛育養護学校）

震災後の子どもたち(7)

若者が深呼吸できる場
―ちびくろテント村

村井　雅清



昨年一月十七日六千人を越える死者を出すという未曾有の大地震が兵庫県南部地域を襲いました。報道によると全国各地から百三十万人のボランティアが集まってきたとのこと。『ボランティア元年』と言う文字が何度も私の目に飛び込んできましたが、そもそも『ボランティア』という言葉は私には馴染まない単語なのです（多分、四十五歳という年齢がそうさせるのだろうと思います）。

私たちの『ちびくろ救援ぐるうぷ』にも中学生から高校、大学、社会人までたくさんの人たちが救援のために全国から集まってきました。私たちのぐるうぷは特に年齢制限をしていないため、中学生、高

校生が少なくありません。公園にテントを張り、プレハブを建てて、いわゆる〝テント村〟を活動拠点にしているせいか、居心地がいいようで特に彼等は一度来ると二度目からは二か月、三か月と居着く傾向が目に付きます。

〝テント村〟の生活の中で中・高校生の彼等から話を聞いてみるとどこか日常社会からドロップアウトしているように思えるのです。

留年になった夜間高校生、不登校を続けている中学生、休学届を出して進路に悩んでいる大学生など、被災者を含めて十人位が常時〝共同生活〟をしながら救援活動を続けています。彼等は数名の社会人たちとうまく間合いをとりながら自分の〝拠点〟を見つけようとしているように見えます。

一年間、彼等と一緒に生活をしてきて私自身も随分悩み、また多くのことも彼等から教えられてきました。それは私の十代、二十代を過ごしてきた時と違うことが多いからだろうと思うのですが高校を卒業して二十五年余り、一日、十時間から十二時間、ずっと早朝から夜遅くまで働き続けるという生活を震災前まで送ってきたためにそのリズムが日常になってしまい私の体にしみついています。私の震災前までの日常と彼等のここでの日常は全く違う世界のように思えるのです。

〝テント村〟での決まり事は朝九時にミーティングをするということだけです。それ以外は全く自主性を尊重し運営をしているのですが彼等自身で決めた「九時に集合する」ということを守るのが彼等には大変なようであります。

ところで私の日常と彼等のここでの日常が違うと書きましたがそれはひょっとすれば、価値観・人生観の違いではないだろうかとこの一年間で感じるようになり二十五年間に体にしみついた価値観を私自身は正しいとすら思ってきたが彼等の感性から湧き出る表現、行動の素晴らしさに何度も教えられることを感じ二十五年間しみついてきた価値観は間違っ

ているのではないかと悩むときが多い自分に気付きます。

例えば私は救援ぐるうぷの代表をしているものですから朝九時にミーティングのコーディネイト役をするのですが、ともすればいつもまとめようと無意識のうちにしてしまい十七歳の夜間高校生から『別にまとめんでええやん』と忠告をされるのです。あるいは活動の割り振りを毎朝するのですが普段はメニューだけを提示し各々が各々の判断でいきたい活動を入札!? して活動にはいるのですが夏休みとか春休みとかのシーズンには短期で人の波が来る為、ともすれば機械的に処理しようとしてしまうのですがそんな時でも、『また仕切ろうとして』という忠告が入るのです。

私にとってはごく当然のシステムだと思い込んでいることが彼等にとっては当然ではなく不自然なシステムなのです。震災直後は活動拠点もともすれば冷静さを失い、パニックの日々が続いたのですが夏を過ぎた頃から少しずつ落ち着きが見え始めて来ました。しかしそれでも非日常の空間がテント村にあるように感じていたのですが実はここでの人と人との関係は非日常ではなく「これが日常なんだ」と気付くのです。テント村の日常性が実は現在の教育現場や職場・家庭の中に存在していなかったのだろうと分かるのです。

当然、彼等は学校や社会からドロップアウトせざるを得ないのですが彼等から見れば、私たちの方がドロップアウトしていると見えるのでしょう。

先日、東京から彼女と一緒に車で来た学生がいて（車は父親の車らしい）彼の車に乗って二時間ほど一緒にドライブをした時のことですが、その彼は車に乗っているが全くといっていい程、車のことについて無知なのです。この寒い季節に東京からずっとクーラーをかけて走って来ており、A／Cというスイッチがクーラーであることを知らなかったのです。思わず笑いころげてしまった私ですが私にとっ

ては考えられないことなので彼に「おまえこういうスタイルで生きていて今までに困ったことはないか？」と聞いてみたら迷わず、彼は「別に」と答えるのです。その答えを聞くまでは笑いころげていた私がしばらく、深刻な顔つきになり考え込んでしまったのです。

彼はこんなスタイルで今まで生きてきて「別に困ったことがない」ということなので、「こんな人生があってもいいのか！」と考えさせられるのです。きっと私は二十五年間しみついた価値観を無意識のうちに周りの人たちに押しつけてきたのだろうと気付かされたのです。この一年間テント村という共同生活を救援活動をやりながら続けてきたわけですが私は自分自身と葛藤しながら彼等に教えられ気付かされやっと一年間を終えることができたのです。

今までの身体にしみついてきた価値観を全て変えるにはまだまだ時間が必要となりますがこれからの一日一日を大切にしなければならないことを痛感している次第なのです。大震災から一年過ぎましたが私たちは今までの一年間を振り返って年末からミーティングを続けています。「何故、神戸に関わり続けるのか？」「何故救援活動をやっているのか？」「被災者の自立救援とはどういうことなのか？」ということを真剣に話し合っています。議論の中で夜間高校生であり、とうとう休学をしてしまった事務局のY子は次のように語るのです。

「このテント村をずっとずっと維持し続けたいのは、ここにいるといっぱい、いっぱい深呼吸ができるから……」と。

（阪神大震災ちびくろ救援ぐるうぷ）

開発途上国での保育による国際協力

――スリランカにおける青年海外協力隊幼稚園教諭の活動――

前田　美知子

幼児教育の土地を耕す

平成元年、スリランカ最大の都市コロンボから九〇キロのクルネガラに、青年海外協力隊の幼稚園教諭上遠野（かとおの）節子隊員が赴任した。彼女の所属は青年問題雇用省国家青年活動評議会。無職の青年に職業訓練をしたり、自立に必要な資金の貸付を行う所だった。彼女の仕事は貧しい農村に点在する小さな幼稚園の先生たちを対象に講習会や巡回指導を行うことであった。この先生たちも講習を受け、貸付金を元に寺や公会所を借りて自分で幼稚園を開園している人が多かった。仕事のない村の女性にとって、幼稚

園の先生という職業も収入を得るための手段に過ぎない場合も少なくなかった。

スリランカでは幼稚園を指導する官庁はなく国として一貫した幼児教育体系もない。個人、団体・組合・寺などがそれぞれの目的・方法をもって独自に幼稚園を運営していた。

▲農村の幼稚園を巡回指導する上遠野さん（平成元年）

上遠野さんは早速講習を開いたり、農村の幼稚園巡回を開始する。幸い任地クルネガラの事務所長は「幼稚園」に理解と期待をもってくれる人で、上遠野さんのカウンターパート（協力者）として省の公務員でアーリャラタさん（愛称をアーリイ）という優秀な女性を組ませてくれ、二人は一緒に活動することになった。

農村の園を巡回すると「白いお姉さんが来た」と泣き出す子どもがいたり、先生が棒を片手に子どもを教える場面に出合ったりした。

幼稚園は勉強の場であり、縁台式の机・椅子で文字や数字だけを教えている。勉強の切れ目に上遠野さんが簡単な手遊びや縄とびをして子どもたちと遊ぶと、子どもたちの笑顔も見られ、サリーの裾をたくし上げて縄とびをして見せる先生たちも見られるようになった。

巡回していくと以前訪れた園が廃園になっているのに出合うことがあった。先生は転職、園児たちはどうなってしまったのだろう。農村は貧しい。収入のよい仕事に移らざるを得なかった先生を、豊かな国からやって来た協力隊員はどうする術もなかった。

講習会では廃材の集め方、それを使った製作、文字や数え方を面白く教える教材づくりなどの実技指導に、子どもの気持、接し方についてのケーススタディなどを加えていったところ先生たちの意識も少しずつ変わっていった。

カウンターパートのアーリイは役人であり幼児教育には知識や経験がない。考えの食い違いもよくあったが日を重ねるうちに二人の気持の中にも大きな変化ができてきた。

アーリイは通信教育で幼児教育の勉強を始め、スリランカのためには教育に力を入れていかなければならない、教育の中でも幼児期の子どもの教育がど

▲貼絵の実技研修（平成４年）

れほど大切であるか切々と述べるようになった。二人は巡回の道で夢を語り合うようになる。「クルネガラに村の先生たちが集まって勉強できる施設を作

▲「みて、みて！　私の貼絵」意欲的になってきた先生たち

りたいね」「モデル幼稚園や先生の養成コースができたらいいね」

上遠野さんは協力隊員としての二年間の任期終了を前に、アーリイを協力隊のカウンターパート研修の研修員（日本において十か月間研修する）として推薦した。本人も強く希望したが現実は厳しく日本側の受け入れ県がなかなかみつからない。あきらめかけた時、福島県の郡山女子大学短期大学部でアーリイを受け入れてくださることが決まった。

郡山女子大学では始めての開発途上国からの研修生として、聴講と付属幼稚園での実習をさせてくださることになった。関口はつ江先生（保育科主任教授・付属幼稚園長）はアーリイに「自分から学ぶことが大切です」と話され、彼女も意欲に燃えてひたすらに学んだ。

夏休みには、任期を終えて帰国し復職していた上遠野さんの勤務園（荒川区立東尾久保育園）で保育実習をさせていただいた。当時、開発途上国の大人

が保育現場に入ったのは始めてのことだったが、子どもたちは上遠野先生のお友達が来たと喜んで遊んだ。アーリイもいまは「保育者」になっていたのだった。園長川崎登志江先生、保母さん、お母さんたちも国際理解と協力のよい機会になったと喜んで下さった。

「日本の幼児教育を学び、帰国したら、スリランカに合った幼児教育を考え、実現に向けてがんばります。スリランカにいた頃の上遠野さんの気持がいまわかります」とアーリイ。

二人が幼児教育を共有し合えたことが何より大きな喜びであり、国際協力となったのである。アーリイは日本での十か月間の研修を終えてスリランカに帰国した。

クルネガラでは、二代めの青年海外協力隊幼稚園教諭阿部純子隊員がアーリイを待っていた。彼女は郡山女子大学短期大学部の卒業生で、赴任前にアーリイとも話し合っていた。クルネガラに幼児教育の土地は耕されている。平成四年春だった。

幼児教育の種子をまく

協力隊の活動に必要な要素がある。ボランティア精神・チャレンジ精神とそれを裏付ける仕事の専門的経験と知識・健康な心身・現地語を駆使する意欲・コミュニケーション能力・折衝力などである。

「スリランカの子どもや先生と話したり、遊んだりするのが楽しみ……」幼稚園教諭としての経験七年。アーリイとのコンビでシンハラ語の壁もクリアしながら勇んで巡回と講習に取り組んだ阿部さんだったが、次第に重い気持を抱くようになった。机に長時間しばりつけられる子どもたちの輝きを失った目。子どもの心を押さえつけている先生の姿を思うと胸が痛い。アーリイも焦りを感じている。

各園を巡り現場で先生・子どもたちを丁寧に指導

する草の根レベルの地道な活動に徹するのがよいのだろうかとの思いもあった。だが、子どもたちのためには幼稚園の先生を育て、その先生たちが保育をすることが大切なのだ。

阿部さんは資料や情報を収集してみた。

スリランカ全体の幼稚園教育の実情は

1 幼稚園には教育体系の中の位置づけがない。教育省その他の省庁の指導はない。
2 全国的に幼稚園が急増の中で、国の統計はない。
3 自由に幼稚園が設立され、施設や内容の格差が大きい。
4 幼稚園教諭の資格・免許制度はない。
5 都市にプライベートの幼稚園教諭養成コースがいくつかある。ただし実習はない。
6 職業訓練・現職研修の講習会が行われている。
7 幼稚園教育に対する関心は高まっている。

スリランカの幼稚園教育についての考察

1 一貫した教育体系がなく、幼児教育に関する正しい知識を持たずに幼稚園を設立したり、指導に携わる者が多い。
2 学校授業型の幼稚園（モデルは小学校）が多い。
3 教育内容は読・書・算の指導が主である。開発途上国の多くは二つ以上の言語を使用している。生活の貧しさ厳しさから読み書き計算を早くから身につけさせることが必要とされている。貧しい中で子どもの将来を考えるとき親が望むのは必然と思われる。しかしながら、幼児の発達を配慮した指導の方法・教材はほとんど考えられていない。
4 大人の権威が重んぜられている。

日本の幼稚園教育もその昔通って来た道である。日本の現在の保育から考えると問題ばかり見えてしまう。スリランカの文化・習慣・社会的背景を十分尊重した上での幼児教育を考え、それを実際に指導し改善していくことが必要だ。

ア 幼児期の「遊び」の大切さを伝えながらその中で

の文字・数の教育をバランスよく取り入れていかなければならない。その具体的な方法を示し、先生たちの考えも引き出していくことが大切である。

イ先生たちは歌・ゲーム・ダンス・造形など全てにおいて経験不足である。できないのではなく、経験したことがないので知らないだけ。従って先生が楽しんで行い、楽しいという経験をし、楽しいことを先生自身から子どもたちに伝えられるようにしていかなければならない。そして楽しさの中に含まれている意義も伝えられなければならない。そうでなければ経験不足故にただの遊びで終わってしまう。ひとつひとつ丁寧に理由を説明しながら、ケーススタディーを行うことによって、多くの経験を積むことが教師養成においては最も効果的なのである。

実は以前から青年問題スポーツ省からはモデル幼稚園と幼稚園教諭養成センター設立を要請されていた。これは大きな要請である。阿部さんが日本にいたらこんな大きな課題と向き合うことがあっただろうか。「果たして私に教諭養成センターなんてできるんだろうか？」「幼稚園の設立と運営？私に？」心の中でたじろぎの声もあった。しかし子どもたちが生き生きと遊び、先生が楽しそうに保育をする姿が心の中に浮かぶ。幼稚園教育の波及効果と将来を考えなければならない。「やろう。やってみよう。アーリイと」阿部さんの心は決まった。

平成四年、日本からも施設・設備の資料などを取り寄せ参考とし六月に設計図が完成。モデル幼稚園と教諭養成センターの用地をスリランカ側が用意し、山だった土地をたった五日間で整地してしまった（途上国として驚くほどのスピードで、熱意と期待が現れていた）。建物の資金は日・スで支出した。プロジェクトが決定されると大勢の人を巻き込んで複雑な仕事にひろがっていく。

▲「私たちのモデル幼稚園ができた」モデル幼稚園開園（平成６年）

省の担当者・設計者・施工の業者・地域の人々・日本側も現地ＪＩＣＡ事務所や他の職種隊員の協力。人の輪がひろがり人間関係もふくらむ。保育の国際協力は大きなつながりとなり、建物となって立ち上がっていった。

一方巡回指導と講習も続けていった。「お金がないから人形もボールも買えない、だから幼稚園をやっていかれないなんて弱音を上げないでいこうね」と話し、空箱や布で遊具を作ったりゲームをしたりという経験をさせる。新聞紙一枚で一年分の保育内容になるくらい多様なことを考えられる先生も育った。

モデル幼稚園設立に向け阿部さんは任期を一年半延長。幼稚園教諭佐野・井上両隊員を増員。そして指導者にアーリャラタさんが就任した。モデル幼稚園の教員を募集したところ百名の応募があり四名を採用した。園運営・教育計画・学級指導の研修をしながら開園準備。園舎の壁画も皆の力で仕上げる。

平成六年四月、遂にモデル幼稚園サクラ・プレスクールと幼稚園教諭養成センターが完成。

建物に子どもたちの声がひびく。タイヤの遊具に挑戦する。雨上がりのドロンコ遊びが盛り上がる。先生が育てば、子どもが育つ。養成センターに村の先生たちが学びに来る。子どもを見て先生たちの目が、意識が少しずつ開いていく。お母さんや地域の大人・子どもたちも幼稚園に注目し、活用し協力的になってくる。

スリランカに幼児教育の種子をまき、まだまだと思っているうち芽が出始めたところである。

（青年海外協力隊幼児教育アドバイザー）

＊

青年海外協力隊について

青年海外協力隊は国際協力事業団（ＪＩＣＡ）が実施する政府開発援助（ＯＤＡ）事業の一つで、開発途上国への技術ボランティア活動の支援を行っており、一六〇の職種がある。

隊員は現地の人々と同じ言葉で話し生活しながら、開発途上国の新しい人造り・国造りに協力し、人から人へ、心から心への技術移転と国際親善に励んでいる。

幼児教育については昭和五十四年から、幼稚園教諭一〇二名（内男性二名）、保母四十七名が二十か国で活動している。開発途上国では幼児教育のニーズが高まってはいるが、歴史が短く専門性が確立していない。日本の保育者の経験と知識を役立て、途上国の教師・保母を支援し幼児教育の道を広くしていきたい。

問い合わせ先

青年海外協力隊事務局（国内第二課）

〒150 東京都渋谷区広尾四－二－二四

電話　〇三－三四〇〇－七二六一

ある日の育児日記から (64)

佐藤　和代

圭もとうとう小学生です。ついこの間までおっぱいを飲ませていた気がするのにな。なんて感傷はさておき、今は、学校で使うものをそろえるのに、ちょっと忙しい思いをしています。

学校の説明会に行ったら、手提げのサイズはこれくらい、消しゴムは白いものに限る、筆入れはカンのものは不可、などとこまごま説明がありました。けっこう面倒なのね。加えて、びっくりしたことがひとつ。学校でおもらししたり、下着を汚したりした場合、保健室で下着を借りられるとか。そしてその場合、新品を購入して返すことになっている…え？　洗濯して返すんじゃないの？

「人の着た下着は着せたくないという声がありまして…」私はちょっと、カルチャーショックです。保育園では皆一緒になってころげまわって、よだれだっておしっこだって平気で友達と共有(？)していたのにね。まあ、小学校には思春期の女の子までいるわけだし…。でも何か釈然としないものを感じてしまう。大きくなれば人のものはきたないと思って当たり前とは考えたくないし、新品を買うことに何も抵抗を感じないのもいやです。

この際、圭の道具類は、できるだけ新品を買わずにすまそうっと。えーと、これはケチとは違うのよ、圭。

一点豪華主義で買ったドイツ製色えんぴつでしたが。

保育者が自分の価値観を見つめ直すために

田代　和美

十二月のある日、小学校一年生の娘がいじめ相談の電話番号が書いてあるカードを拾ってきた。「これで何があっても大丈夫だ」そう言った。その日の夕食時、彼女は学級委員は何年生からなれるのかと聞き、自分はリーダーになりたいと言った（彼女のクラスにはグループごとにリーダーがいる）。「私がリーダーになったら、命令したり威張ったりしない優しいリーダーになれるんだけどな」と。夜、暗がりの布団の中で話をしているうちに「私は、弱くないもん。今日だって六人にやられても……」あとは涙になった。大泣きの中で聞いた話は、以前からやっていた猫ちゃんごっこに

数日前から、リーダーをやっているA子ちゃんとB子ちゃんが入り、おばあさん役をしていた娘は「ばばあ」にされ、それがどんどんエスカレートしていった。三日間くらい我慢してやっていたが、その日は我慢できなくてその仲間に入らずに、一人でブランコに乗っていた。すると六人が来て、「裏切り者」「もう仲間にいれてやらない」などと言い、その後無視をしたり、わざわざ振り向いて嫌な顔をされたと言う。A子ちゃんに対する恐怖、そして一番仲のよい友達がその中に入っていたこともショックだった。とりあえず落ち着かせるために、学校を休ませた。（これ以後の事は、もう少し冷静に距離をおいてから書きたいが、今回は大まかのことのみを記しておく。）娘の一番仲のよい友達もA子ちゃんから仲間外れや無視をされて恐がっており、今回のことも「本当はそんなことやりたくなかったんだー」と泣き叫んでいたことや仲間外れ、無視、嫌がることをわざとやるなどが日常化しているなどのことから、これが単なる一過性のことではなく、クラスの中で構造化していることが分かった。A子ちゃんの母親とは何でも話せる間柄で、彼女となら一緒に何とかやれるのではないかと思い、悩んだ末に事を伝えた。それから両方の家の中での親子の苦しい日々が続いた。子どもが寝てから我が家の中で、そしてA子ちゃんの母親と話を重ねた。「目をつぶると大きな目玉が追いかけてくる」と眠れなかったり熱を出した娘は当然だが、母親が簡単に謝って済ませてくれないA子ちゃんも苦しかっただろう。子どもたちの

話を聞いていく中で分かったことは、先生に言っても「自分たちで解決しなさい」としか言わないこと。リーダーという存在は、命令したり威張ったり、何をやっても許される、担任のような存在であること。リーダーの子どもたちは先生の価値観に沿おうとして、相当な無理をして頑張っていること（A子ちゃんにしても、入学以来、夜中に叫んだり、歩き回ったりするようになっている）。その子どもたちだけが存在を認められ、それ以外の子どもたちはクラスの中では存在価値がないこと。その構造が子どもたちの遊びの中にも持ち込まれていて今回のようなことが生じていること。

A子ちゃんと娘の間は五日間かけて解決した。しかしクラスにその構造が残っている限り、A子ちゃんがまた学校で同じことをやらないとは言えないとA子ちゃんの母親は考えていた。娘にしてもやる側にまわらないという保証はない。二人は養護教諭に相談した。養護教諭から担任に伝えることを勧められ、悩んだ末、六日後に登校する前の晩、担任に伝えた。担任は気がつかなかったと謝ったが、しかし「誰々にいじめられた」と名指しで訴えられた事実はないと言った。この間の経過を説明し、子ども同士の間は解決した旨を伝えた。しかし久しぶりに登校した日、A子ちゃんから話を聞いて謝るつもりだった子どもたちともう恐くないと思って登校した娘は一緒に遊ばせてもらえなかった。かつ担任はA子ちゃんのことを恐いと思うかどうかを子どもたちに確認し、恐がっている子どもは二人だけなので、やられた側に原因があると、

子どもたちに問題を返そうとしかしなかった。A子ちゃんには、「熱が出た後だから今は休み時間に外で一緒に遊べないけどもうすぐまた遊べるから」と伝えたが、両方の母親は、無力感と共に気持ちが内向していった。養護教諭を通して教頭に待機していてほしい旨を伝え、父親と両方の母親で担任との話合いに臨んだ。教頭も臨席した。

今回の事後の対応についてから、結局は担任のクラス運営についての話に及んだ。私たちが話したことは、これは子どもの問題ではなく、私たちの問題であり、あなたの問題なのだということと、子どもたち一人ひとりの違いを認め、それぞれの存在価値を認めてほしいということだった。三時間かけて話し、方法を変えることなど求めていないと何度も言ったが、「私自身が変わります」と話す担任の口から出てくることは、朝自習や宿題をなくすことやリーダーを交代制にすることなど、どれも方法論だけだった。

翌日から担任の態度が急変した。急に優しくなり、朝自習も宿題もなく、休み時間の遊びの中に初めて入ってきたらしい。子どもたちは遊ぶ場所を変えた。お互いの良いところを見つける話し合いなどを持ったとも言う。娘は初めて交代制でリーダー（ではなく係という呼び方になった）を経験した。朝早く登校し、それなりの苦労もあったようだが、自分が頑張ったことでおそらく初めて担任から認められたのであろ

う。翌日はもっと早く登校すると担任と約束したと言った。担任の意に沿おうとすることは、かつてのA子ちゃんと同じ立場になる。そう考えた両親は「そんなに無理しなくてもいいんじゃない」と言ってしまった。そしてこの日から娘は私に怒りをぶつけ始めた。「ママをうらんでるんだ」と。翌日、早くに目覚しがなっても一向に起きる気配のない娘を私は起こさなかった。いつもどおりの時間に起こしたが、結局その日はお腹が痛いと言って登校しなかった。私が絡んでいると薄々感じたが、娘はストレートに言わないだろうと思い、担任にも伝え、保健室で過ごさせてもらった。絵を描いたり遊んだりしている中で、「実は……」と彼女が話したことから、担任と母親とが自分のことが原因でけんかをしていると感じていること、担任が変わったのは母親が絡んでいると感じていることが養護の先生を通して分かった。娘はすべて察していたのだった。私は薄々は気づいていたものの自分を見つめていない自分にショックを受け、身動きがとれない状況に置かれた。今回の件に担任が絡んでいるなどというのは大人の論理であり、子どもにとって担任は大切な存在なのである。けんかしているのではないということ、そしてもとめてもいない担任の変化については、先生はみんなが意地悪をしないようにするためにどうしたらいいかを一生懸命考えてくれているのだと伝えたが、しかし娘は担任の変化に戸惑っている。それでもこれが三学期も続いてくれれば、以前より悪くなることはないと思う。……これが冬休みまでの経過

である。これから先は父親のみが動くことになる。

担任の先生という存在は、子どもにとって、特に先生の価値観を取り込むか取り込まないかを選択できる年齢に達するまでの幼い子どもにとっては、親と同じくらい絶対的な存在である。絶対的な存在であるからこそ、自分の持っている価値観を常に自覚し、自分の価値観に合わない子どもを肯定する価値も認めていかなくてはならない。上に述べた件も、六年生までにはこのくらい育っていなければならないのだから、一年生はこのレベルまで来なさいと線を引く担任の価値観に必死で沿おうとすることによって存在を認められている子どもとそれに沿わないがために存在を認められない子どもとの間で生じた事である。学校教育とは違って保育者中心ではないにせよ、保育においても保育者の価値観が子どもに与える影響は大きい。しかし大人が自分の持っている価値観を自覚することは難しい。そしてそれが子どもたちに反映されていると自覚することは難しい。子どもから学ぶ、関係性の中での子ども理解といっても現実には難しいのである。もしかしたらと薄々気づいても、認めたくないのが人間だ。いや認める認めないの前に、自分自身というのは気づかないとこの際言ってしまってもいいのかもしれない。私自身、自分のしていることによって子どもを苦しめていると気づくことはできなかった。養護教諭という第三者の目を借りて、初めて気

づかされたのである。

一人一人を大切にする保育を目指したいと言っても、自分の持っている価値観では理解できない子どもをどのように大切にしていくのか、現実的な問題がそこにある。保育がそれを目指そうとするのであれば、そしてそれが子どもと自分の関係の中からは見えにくいという現実があるならば、自分以外の大人の目を通して気づかせてもらうことが必要であろう。気づかせてもらうためには、人の話を受け止めるだけの度量が必要である。その度量をプロ意識と言うのかもしれない。しかし自己否定をされているように感じながら他人の話を聞いていても、認めたくない気持ちが勝り、自分を見つめることにはならない。保育者一人一人が、自分の存在をしっかりと受け止めてもらっていると感じられる保育者集団の中で初めてそれは可能になる。それは子どもとの保育的関係と同じである。一人一人を大切に保育しようと志すならば、この第三者の目にお互いがなれる大人の集団が、子どもたちの保育の場に必要である。

（お茶の水女子大学）

共に楽しむということ

永田　陽子

四歳の十月。友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わい始めた子どもたち。登園するなり「先生、○○へ行ってくるね」と、五～六人の仲間が部屋から飛び出していく。

「○○ちゃんが私のこと入れてくれないの」と悲しそうな顔をして戻ってきたり、ある時は、「私たち○○しているの。見に来て」と声をはずませて呼びに来ることもしばしばである。

四月当初は、私の膝元から離れられなくていつも一緒にいた子どもたちが、友だちの中で生き生きと動いている姿を見ると、ほっとすると共にたのもしくもある。子どもたちがどんなこ

とをするのかなと、毎日楽しい日々である。そんなある日、子どもの一言で自分の保育の振り返りをせまられた出来事があった。

先生も楽しまなくっちゃ

「おばけ屋敷をしているから見に来て」と、呼びに来たので遊戯室へ行ってみると、遊戯室は黒幕が閉められ真暗。子どもたちは年長の何人かの女の子たちと一緒におばけになり、お互いにおどかしあっている。そこに他のクラスや年少組の子どもたちや保育者が加わり満員。入口ではY子が「いらっしゃい。こわくないですよ」と案内をしている。あまりに盛り上がっている様子に私は安心し、「おもしろそう。また来るね」と言い、戻ろうとすると、Y子は「先生も楽しまなくっちゃ」とにこにこしながら言った。私ははっとし、あわてて「そう、そう、おもしろそうだから、先生も楽しんじゃおう」と中にはいってみた。すると、それぞれの子どもが私に向かって表情やからだの動きや声色を変えたりして飛びついてきた。私も一緒に驚かしたり、驚かされたりしながら、キャーキャーと声を出しながらスリルを楽しんだ。遊戯室の中央には何やらおばけの効果音のカセットテープも回っていた。「また明日、続きをしようね」で終わった。しかし、次の日は続きは始まらなかった。

思い返してみると、「先生、おばけ屋敷しているから見に来て」と呼ばれたのに、何故、加わろうとしなかったのか、自分でも不思議である。今のクラスの状態が、保育者と子どもの関係から子ども同士の関係へと広がりつつある時だと感じている。だから、なるべく遠目でみて

いようと思っていたこともあるが、私はつい遊びが盛り上がっていると安心してしまうところがある。また、遊戯室でおばけ屋敷の遊びが盛り上がっているということを、他の子どもたちにも教えてあげなければと思っていたような気がする。もし、遊びが盛り上がっていなかったなら、一緒に加わり何とか楽しく出来るような援助をしただろう。

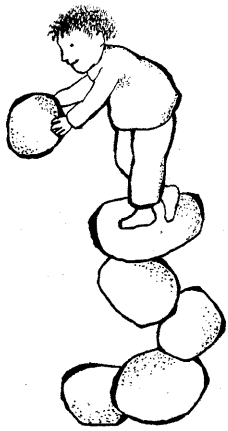
おばけ屋敷の中に入り込んで、子どもたちと一緒にその場に浸ってみると、実にさまざまなことが感じられる。子どもたちにとってこの暗やみはどんな意味があるのだろうか。何故、今のこの時期におばけ屋敷をこんなに楽しんでいるのだろうか。

先日、年長組と一緒に近くの小石川植物園に園外保育に出掛けた。二～三日前に年長組から自分たちで決めたそれぞれのパートナーにお誘いのお手紙が届いていた。当日は秋の自然の中で走りまわったり、木の実を集めたりして楽しい一日を過ごすことができた。その後、園生活の中でも年齢やクラスの枠を越えて、誘い合って一緒に遊ぶ姿が見られるが、まだまだ緊張の伴ったものである。目的も明確でなく、ただ群れて遊ぶ楽しさの経験。これは園という日常的な環境から放れて成立した楽しさであった。園に戻っても、誰々ちゃんと遊びたいとか、○○して遊びたいといった明確な意図をもつものではなく、みんながワイワイと楽しむ、その集団

的な雰囲気を味わいたかったのだろう。その場合、カーテンでしきる、暗くするといった環境の設定が重要な意味をもっていたのではないかと考えられる。

そう言えば、私もまだ関係の浅い他のクラスの子どもたちとおばけ屋敷の遊びの後、何となく親しみを増した関係になったことは不思議である。そして、次の日に続きをしなかった子どもたちの姿も納得出来るし、ていねいに見てみると年長組とのかかわり方も違ってきたような気がする。いつもおとなしい子どもも暗やみの中では、からだ全体をつかって生き生きと表現しおばけになり切っていた。

暗やみの中でからだがふれ合った自由な体験が次の遊びや人とのかかわりに変化をもたらすのだろう。最近、クラスで読んだ『おしいれのぼうけん』の絵本をみんな大好きになり、何度も読んだことも関係があるのだろうか。暗やみへのあこがれをクラスの子どもたちが持っていたことは確かであった。



子どもたちが自ら遊びを創造していく力を保育者がどのように受けとめ、明日の保育に生かしていくのか、遊びの中に入り込み私も一緒に楽しみながら、一人ひとりの子どもの遊びの充

実を探り、共に体感することによって、始めて確かな幼児理解や適切な援助が生まれてくるのであろう。保育者が、集団が育って欲しい、子ども同士で何とかして欲しいという願いを持っているからといって、遠目で見ているだけであったなら、それは放任保育であり、個々の子どもの育ちや集団がどんな風に育っているのかを捉えることは出来ない。

「先生も楽しまなくっちゃ」の一言が、このおばけ屋敷の遊びにどうかかわるかということだけでなく、子どもたちが織りなす遊びを具体的にどう捉えたらいいのか、援助の方向性が見えてきたような気がする。最近、「共に生活する」・「共に～する」ということがよく言われる。楽しみを共有しながら保育者が子どもとかかわっていると、その動作が子どもたちの中に伝わっていくものがあるのだろう。保育者が自ら遊びを楽しむこと。つまり保育者として役割意識を離れ、まずは「共にいる」こと。大人として子どもの中にいることの意味・役割を改めて考えさせてくれた。

とはいえ、子どもに「先生も楽しまなくっちゃ」と言わせてしまった私。子どもにとっては、共に楽しむ相手ではなく、先生という存在に映っているのだと改めて反省した。

「先生も楽しまなくっちゃ」の一言が、これからの私の保育に大きな示唆を与えてくれた。そんな子どもたちに感謝の気持しきりである。

（日本女子大学附属豊明幼稚園）

トポスにおける発達

第 7 回

身体性の変容——運動会におけるからだの意味

無藤　隆

子どもの活動として、体を動かして遊ぶことはもちろん大きなウェイトを占めている。それは同時に、トポスとしての問題でもある。園の環境を見直したとき、子どもが運動している様子が目に付くが、それは子どもがその空間を利用している姿でもあり、また、子ども同士の関係が体の動きがともに作り出す関係を形成している様子でもある。

普段の遊びでも体をもちろん常に動かしているのであるが、運動が主な目的になっている遊びがその中にある。三輪車・自転車に乗ることや、ブランコ・滑り台などの遊具の利用、単なる駆けっこなどがあり、また、サッカーやドッジボールなどのスポーツも正規のルールではないにせよしばしば行われている。それは単に体を動かすのみならず、環境にあるものに関わり、空間を独自の形に変容させ、また、一緒の遊びをする仲間との独特の関係を成り立たせ、その遊びに入っていない仲間と区別する関係を作る。

逆に、トポスの関係の側から言えば、ある種の運動を可能にし、しやすくする空間のあり方があり、それの元で、運動とそこでの関係が成り立つ。それは保育の問題として言えば、いかなる空間を成り立たせ、いかなる運動と関係を可能にするのか、それがどのような方向へと変貌することが望ましいのかを論じるべきだということである。

日常の遊びのみならず、運動会などの行事はとりわけ独特の空間・関係・運動のあり方を構成する。運動会は、多くの園では保育の成果を親に公開する機会であり、子どもの目当てとして立てることで集中した努力を促すときであり、また、異年齢の交流を可能にする場ともなる。晴れやかな楽しみの場としての行事の意味ももちろんある。だが、そのための練習が行き過ぎ、日常の保育を阻害することも「行事保育」としてしばしば指摘され、いかにして普段の遊びの延長線上に運動会を構成するかも工夫されている。

本稿では、運動会での運動のあり方を「リレー」の練習の姿の検討から考えてみたい。だが、そのことに行く前に、運動会の発生の歴史から学び、そこでの現代での意味を再考しておこう。

運動会の思想——歴史的検討から

社会学・政治学の研究者である吉見（吉見俊哉「運動会の思想——明治日本と祝祭文化」思想、一九九四、十一月、P・137－162）は、日本の学校における運動会の発生を近代日本の国民国家成立の過程での教育的展開の中に求めて分析している。ここで、その要点を紹介しながら、特に現代の幼稚園での運動会のあり方に示唆を与える点を抜き出そう。

運動会はいつ頃から小学校の行事として成立したのだろうか。「運動会」と呼ばれるものは、明治十八年頃に誕生し、数年で全国の学校に普及したと言う。しかし、この初期の運動会は、そもそも行われる場所が学校から離れたところであって、まだ「遠

足」や「行軍」と区別できないものだった。これは江戸時代から物見遊山の延長という面もあったが、同時に、軍隊の行事や演習の側面も持っていた。目的地に至るまでの行軍を重視していたし、さらに、競技自体が、運動競技というより軍事演習的な色彩を強く帯びていた。

こうした普及の制度的思想的前提を作ったのが、明治十八年に文相になった森有礼であるという。森は「国家論的な観点から児童の身体の規律・訓練化を強力に進めた」（P．142）。森は、「一方で、この国の子どもたちが近代的な身体技術を獲得した主体へと残らず調教されていかなければならないと考え、他方で、そうした主体の力能が天皇を頂点とする国家的な共同性のなかに一元的に収斂されていかなければならないと考えていた。そして、これら二つの相互に連動する国民＝国家的な身体工学が試され、作動させられる理念的な装置として学校を捉えていたのだ」（P．143）。

明治二〇年代半ば以降になると、新たな変化が生じてくる。それは、競技の内容種目が増加し、特に、球技や徒競争といった現代でも行われているものが出てきたことである。個人単位で運動能力を比較する競争種目が増大したことが注目される。「明治三〇年代以降、運動会のなかでの競争種目の増加により、運動会が、参加する児童各人にとって自らの技能が衆目のなかで可視化されていく機会として経験されていくことになる。運動会はしだいに、『遠足』や『模擬戦』という以上に『試験』にも似た性格を帯び始めるのである」（P．149）。平等な条件で競い合うことによって、各自の力の度合いが見られることになる。それは、平素の教育訓練の成果を示す機会として擁護される。

そのことから、「そうした競技が行われる空間が児童の「精密なる観察」を容易ならしめるように整備されていく必要があった」（P．149―150）。実際、明治四〇年以降、運動会が開かれる場所が学校内の

運動場でなされるようになったという。運動会から行軍的な要素が消え、移動の時間を多種目を実施することに使えるようになったことに加え、「運動場という区画化された領域において、集合した児童たちの身体技能は、以前よりもはるかに容易に可視化され、測定されていくことができるようになったのである」（P．150）。

個人の競争を奨励することは教育的に好ましくない問題も生む。そのジレンマを解決するための工夫として出てきたのが、見ている子どもが応援を行うことや、「各々の競争を当事者だけの競争とするのではなく、より大きな集団間の戦いとして示していく工夫を施す」（P．152）ことなのである。個々人の運動技能の提示や競争と、その集合としての団体の対抗意識をもり立てての競争が一体のものとして結びつけられた。

しかし、運動会は、単に身体訓練とその成果の提示・競争のためだけにあったのではない。もう一つの大事な要素が村の祭としても機能していたということである。運動会は当初からその地域の多くの住民が見物に訪れていた。児童と村人が一緒になって楽しむ祭りでもあったのである。その祭り的傾向は、大正期にはいっそう顕著になったという。学校の祭典であり、町村の祭りであった。ここで注目できるのが、明治三〇年代以降、学校の行事が地域の年中行事としても重視されるようになったことである。それは、伝統的民族的な祭りを学校のなかに、そしてそれを通して国家の時間のなかに組み入れることである。その過程において、「児童一人ひとりの、そしてまた国民一人ひとりの身体を再構成してきたのである」（P．158）。

以上の吉見の論考の整理から明らかに、近代日本国家の

成立において、学校制度が子どもの身体のあり方までをも規定し、また同時に地域での祭りを学校ひいては国家の中に組織化するものでもあった。運動会とはそのような大きな近代の流れのなかの一こまである。この議論が現代の学校の運動会に対して何を示唆するかは、もちろんまた別のことである。歴史的な由来は必ずしも現代でのその機能を示すものではないからである。しかし、現代のあり方を見る上で有力な視点を提供しているであろう。

はじめに述べたように、現代の学校の運動会は、日頃の教育の成果を示すと同時に、親や地域の住民を交えた祭りでもある。子どもの集団的な競争があるが、同時に普通は個人毎の競争もある。独自の身体的な動きを要求するものでもあろう。行われる場所は大概、運動場である。程度の差はあれ、このような小中学校での運動会の特徴は多くの幼稚園でのそれに当てはまらないわけではない。だが、同時に、幼稚園では、多くの場合に、競争的な要素を和らげ、遊びとしての要素を強調するだろう。次に一つの事例でその様相を検討してみたい。

ある幼稚園でのリレーの様子

次に示すのはある東京の幼稚園での運動会のためのリレーの練習やリレー遊びの様子である。すべて私が観察メモを取ったものである。紙幅の関係で、事例の要点のみ示す。

五歳児がリレーの練習をする。運動場に両側が丸く間に二本直線が引いてある。スタート＝ゴールに走路を区切って線が引いてある。真ん中には線が二本引いてあり、赤と白が分かれて並ぶ。二か所の角にはコーンポストが置いてある。赤と白が棒を渡してリレーをする。

子どもが次々に一周する。子どもによっては線の内側を走る。保育者と学生が角に立って、応援する。続けて、同じ子どもが繰り返し走る。そこで、保育者が終わらせる。

次のリレーでは、保育者が「一番最後の人」に色の紐をつけ、「ゴールしたらおしまい」とする。角に立った保育者が中に入ろうとする子どもを制止して外を走らせる。途中で中に入った子が二人いる。赤が先にゴール。白のアンカーは内側を走ったので、保育者がやり直させ、皆が応援する。

さらに練習した後全体は解散し、子どもたちの内十数名がリレーをする。保育者も一人ついている。内側を走る子どももいるが、他の子どもはあまり見ていない。保育者が一度やり直させる。その後は、内側を大体走る。アンカーがいないので、次々に後ろに並んで走っている。一人の子が内側に大幅に入って走った後、「ズルする」と一人の子から非難がある。遅れ過ぎると、次の番の子とともに走る場合すらある。

これらの事例で、特徴的なことは、二人の対になって走る子ども同士であまり差がつかないことである。どうしてであろうか。一つには、足の速い子と遅い子とが適宜入り交じっている。そもそも走る距離が短い。また、差がつきだすと遅れた子は必死で走っている。前の子を目標にしているようである。それに対して前の子は時折後ろを振り返ることが多いので、遅くなる。立ち止まって見ている子すらいる。遅れた子は内側を走って近道をする。近道はよほど大幅でない限り気づかれない、あるいは文句を言われない。バトンを受け渡すときにもたつく。これは前の子どもの場合の方が二人待っているので問題になりやすい。以上から、子どもにとっては、リレーは集団の競争である以上に、たまたま対になった相手との一対一の競争であるように思える。

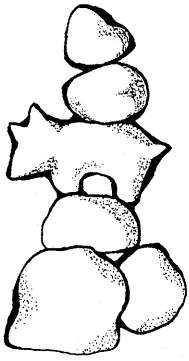
子どもたちが自分たちでリレーを遊んでいる場合、アンカーを決めたりしない。そもそも二組を同じ人数にもしていない。次々に並んで繰り返し走っている。集団としての競い合いが成り立っていない。保育者が組織化しない限り、子どもたち自身の

遊びとしては、一対一でどちらが速いかを競っている。それも、あまり離れることなく、具体的に追いついたり、追い抜いたりすることが重要なようである（ただし、一方的に走っていく子どももいる）。

この後の運動会が近づいてきた頃の練習では、保育者がかなり立ち入っての指導を行っている。赤と白の組の対応する子どもの手をつないで並ぶ。後ろにいる子で対応する子どもがいないことを保育者が指摘し、初めに走った子どもが後に回りもう一度走るように指導し、最後に走る子どもを確認する。角に保育者二人と学生一人が立つ。走り始めると、見ている子どもは先生とともに応援する。次々に子どもは対で出て、バトンを受け取る。内側を走る子どもは一人だけいる。わずかの差で白が勝つ。保育者が白の勝ちを確認し、白が喜ぶ。この後の練習でさらに繰り返し、またバトンの持ち方・渡し方なども指導している。

ここでは、対の組み合わせがはっきりさせられ、対の間の競争だということが強調されている。同時に、人数がそろえられ、走路をはみ出さないように監督され、集団の間の勝敗が明確にされる。

だが、その後の十数名のリレー遊びでは、子どもたちが自主的に競争し、エンドレスに続けて、保育者が終えさせるまで行われる。子どもの対の対応は



はっきりしないが、走り出すと、一人が前を走っている子どもに追いつこうと懸命に走り、前を走っている子どもが速度を緩め、またそれを見ている子どもが追いつく際には注目することが見られる。

なお、集まりの時間で保育者が、リレーのルールとして、バトンをちゃんと渡すこと、オレンジの線の外側を走ることを確認している。

本番の運動会では、親が見に来ており、また園長、と若干の来賓がいる。入場と歌・踊り、玉当て、障害物競争、忍者などの演技、リレー、綱引きなどが行われ、白と赤で競った。リレーは赤と白の子が対になって順に走り、きわめて接戦でアンカーが入り、白が二回とも勝った。

なお、運動会の後、四歳児十数名がリレーごっこをしている様子を見ることが出来た。保育者が一人入っている。ときどき内側を走る子がいるが、ほとんど文句は出ない。前を行く子どもは途中で後ろを見て、時に足を緩めていた。半周ほど差が付く場合、後の子が内側を走るなどして大概追いつく。二人が近づいて競り合うと、待っている子はよく見る。しかし、離れてしまうと、時に後の子が追いつこうとしない場合もある。一人の子が一度半分くらいを近道したとき、子どもが不満を言い、保育者も注意をして、後から問題として取り上げ、線の外を走るやり方を示した。また、途中で、保育者が子どもの対をつくるように指導して、最後の子どもを確認して走ることを最後にしていた。

以上から、子どもが自主的に遊ぶときは、ただ走ることや二人同士が追いつき追い抜くことが焦点になっているようだ。対での競争は保育者も指導するが、子どもたちもそうする。だが、子どもの自主的なやり方は前もって対を決めるのでなく、走り始めたときにともに近いところで走っている子どもを相手と定めるようである。そこで成り立つ関わりは、身体的動作であり、身体的動作の個々人の間の協応である。集団としての勝敗は意識されない。そもそ

も勝敗を決める手順が実行されない。

保育者が導入し、維持を図っていることは、リレーの集団的な競技としての成立である。順に走ること、アンカーを決め、勝敗がはっきりすること、走路を走るのを守ること（内側を走るのは遊びなら要領がよいことや工夫かもしれないが、ここでは「ずるい」とされる）、見る側の子どもはちゃんと見ているだけでなく応援すること、などである。

だが、そこで重要なことは、そのルールが保育者の援助（および引かれた線、コーンポスト、角に立つ大人などの支え）により維持されつつも、なおかつ、微妙な違反が許容され、また、先を走る子が後ろを見たり、後を走る子が走る勢いを強めたりするところにある。そこに、走る遊びとしての要素が集団的なスポーツとしての形に組み入れられ変貌していく様子を見ることが出来るからである。

それは、単にピアジェ以来発達心理学で言われている集団的なルールに子どもが従うことが出来るようになる変化にとどまらない。その発達的変化はさらに具体的な動きのレベルでは、実は、身体像の変貌であり、身体が結ぶ関係の変貌でもあろう。身体間の動きの直接的な関係から、特定の与えられた形の中に自らの身体の動きを入れ込み、そしてその制約の元で力を発揮することへの変化であり、またその形を見、見られるものとして洗練させていく方向への一歩なのである。同時に、遊びの空間から身体スポーツの均質的な空間への変化でもある。

幼児期の運動会に代表されるような動きの変貌の萌芽は、現代の幼稚園において、集団的なスポーツでの身体像への変化を表している。だが、同時に、遊び的な身体の可能性を保持することにより、その変化を根底において活性化していると見なせるのではなかろうか。

（お茶の水女子大学）

保育の技術(1) 遊び

原口　純子

自信の持てない保育者

幼稚園の今日的テーマの一つに「地域に開かれた幼稚園作り」とか、「幼稚園の幼児教育センター的役割」等というのがあります。週休二日制に伴う施設の有効利用とか、核家族化による育児不安に対する、ベテラン教諭の人材活用等の意味もあるかもしれません。しかし足元を見るとこの時代の要請としてのテーマも、自信をもってうなずくことは難しいのです。地域に開かれたということは、園庭を外部の人に解放することや、老人ホームの訪問ばかりが話題になりますが、本質的には、○○幼稚園はこういう保育をしていますよ、幼児期に大切なことはこういうことで、幼児は今こんな遊びをして、このように育っています、いつでも見たい方はおいでください、育児や子育てに心配ごとのある方は気楽に相談においでください、いつでもご相談に応じますよ、ということではないかと思います。

しかし、幼稚園は開かれているでしょうか。幼稚園の中においてすら、学級閉鎖性の強いクラスはいくらでもあります。A子先生は他の人が保育室に入ることを好みません。ドアが常にしまっていて、入ろうとすると「なんでしょうか」などと言われ、園長ですら入ることをためらいます。多くの担任は父母の参観日も緊張し負担に感じます。ある時は、同学年三クラスが相談して合同の園庭サーキットを組み、どのクラスも同じ遊びを計画されてしまいました。父母にさえ自分のクラス経営を見せたくない教師が、地域になど開かれようもありません。

もちろん他人に見られることは誰でも多少は緊張するものですが、保育者が、「自分はこんなつもりで、こういう保育をしてきました」という自信と誇りと責任がもてれば、父母に対しても、外部の訪問者に対しても心を開いて受け入れることができましょう。学級や園の閉鎖性が強いことは、保育者が保育に自信が持てないことに起因すると思われます。自信があって、心が開かれていればそんなに隠すことはないのです。とりあえず開かれた学級作りから始めて、地域などと言う前に父母に対して開き、良い連携がもてるようにすることであり、一人一人の保育者が自信を持てるようになることが必要です。

子守化する保育者

環境を通して行う教育は、個性的な教師を生き生きさせ、優れた保育者を生み出している一方、子どもを見守るばかりの子守化した保育者も生み出していることに気がつきます。幼児を集めては、号令をかけたり、命令するような保育をやめたのはいいのですが、朝から、あちらにバラバラ、こちらにブラブラして時を過ごす幼児たちを、「幼児の主体性」という名の元に放置される実態に胸がいたみます。そして、恐ろしいことは、これが新しい保育のやり方であると錯覚し、なんの疑問も持たずに日々をす

ごしていることです。教育要領の高邁な精神を具体的な日々に具現化することのなんと難しいことでしょう。

「教育技術」

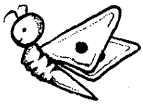
倉澤栄吉先生の「いま教師として」（小学館 一九九三年）という本の最初のエッセイに「教育技術者といわれて」という一文があります。〝友よ〟と語りかけるこの教育の大先輩の語りかけは、教育の技術をしっかり身に付けることの大切さを説いておられます。教育技術は対象を変えれば、保育技術と言えましょう。

保育技術などと言いますと、かつての折り紙の折方やお遊戯の踊り方、手遊び、一斉に集めた保育の導入、展開、終結、ピアノ等を思い出し、古臭いものととらえがちです。しかし、保育に技術はいらなくなったのでしょうか。環境を通して行う教育、遊びを通して行う指導、幼児にふさわしい生活、一人一人に応じた指導という、今日求められている保育技術とはどんなものなのでしょうか。

プロフェショナルな保育者

身の回りにも素晴らしい保育者が何人もいます。彼女たちは、受け持ったクラスの幼児を実に生き生きとかわいらしく、良く育てます。幼児ひとりひとりの輪郭がはっきりしています。これはそれぞれの個性が活かされていることを示します。そのクラスのことを思い浮かべる時、園長ですら名前と顔とが

パッとイメージできます。クラスが集団としてよい高まりを感じさせてくれます。障害を持った幼児や、むずかしい幼児がいる時にも、その幼児を含めていたわりの気持ちや、やさしさが育ちます。父母の信頼も厚く、母親同士も友達になり、良い関係が形成されます。



B子先生はクラスも上手に育てますが、全園児百三十名の親子のレクリエイションを指揮して、新しいフォークダンスを教えゲームを楽しく盛り上げることができます。このような力もプロのものといえましょう。

クラスの子どもたちを、ひとりひとりキラキラ光る宝石のように輝かせ、暖かい居心地の良いクラスを経営できる教師こそプロの教師といえましょう。

多くの優れた保育者を見ていると、保育の専門家としての力量というのは、感性や人柄など適性によるところも大きいのですが、しかし、自分に託された幼児に良い成長と幸せな日々を贈りたいという誠実さや責任感、意欲、情熱があり、よく勉強し、悩み、教材を研究し、準備に労をいといません。

情熱と確かな知識、確かな技術

幼児教育の現場にある者にとって必要なものは、プロフェショナルな職業人としての幼児教育への情熱と確かな知識と、確かな技術ではないかと思います。

保育教材を扱う業者が近頃は保育関係の専門図書、特に理論的なものはほとんど売れなくなったと嘆き、コピーでできる、クラスだよりやパネルシアターの本を紹介し、イラストと写真やまんががいっぱいの週刊誌と見まごう月刊の保育雑誌をおいていきました。時代の変化の中で幼児教育者のイメージもすっかり変わったということかもしれません。

しかし、幼児教育で給料をとるということはプロなのですから、情熱を持って、しかるべき知識と力をつけなければなりません。

今日の保育における技術とは、誤解を恐れずにいうならば、一つは幼児理解及び援助の在り方と、今ひとつは、遊び（具体的な教材、教具、遊び方）ではないでしょうか。この二つが車の両輪として回っていくことが必要です。

かつての保育が、活動を与えることに走り過ぎた反省から、大切なのは「ねらい」「内容」「環境」ということが強調され、指導計画や指導案からすら、具体的な活動名は記入されなくなっています。なぜならば、活動は幼児が直接環境にかかわって作り出すものとされたからです。しかし、担任教諭にしてみれば大方の予想は立っていなければおかしいのです。

幼児理解とか、発達理解なども具体的に、おにごっこをしている姿や牛乳パックで自動車をつくっている姿から、幼児が理解できるわけで、具体的な遊び（活動）ぬきに幼児を理解することは不可能です。むしろ欠落しているのは、遊び（適格な教材や方法）についての知識と技ではないでしょうか。

遊びを知ろう

幼児教育のキーワード、「遊びを通して育てる」というならば、教師は遊びについてプロでなければなりません。遊びの種類、遊びの手順、一つの遊びから可能なバリエイション、年齢に合わせた配慮などなど。

事例　油粘土を与える

四歳の四月　保育室の机に幼児が六人ついています。個人ロッカーからそれぞれ押し型図案つきの粘土板、粘土ケースに入った直方体の新品の油粘土を持ってきて、粘土で遊ぼうとしているのですが、四歳の指の力で直方体の粘土は、ちぎることもできず丸めることもできません。型押しに押しつけて

チューリップなどを写しだしています。

飛び抜けて悪い例ですが、おそらく全国の四月の幼稚園でけっこう見かける風景ではないかと思います。

四歳の幼児の握力、粘土で何を経験させたいかの視点など、粘土の教材一つ取ってみても、どんなに勉強不足で、配慮に足りないかがわかります。教材を選ぶ時点で、なぜ押し型図案のついた板をえらぶのでしょうか。粘土をなぜ個人持ちにしてロッカーにしまうのでしょうか。

四歳の幼児が「粘土って楽しい」と思えるためには、幼児の手で扱える程の大きさにちぎったものがお盆にでものっていればよいのです。粘土板はなにもないシンプルなものがよいのです。型がついていると、粘土を型におしつける遊びに終わってしまうからです。粘土ははたいたり、まるめたりへびにしたりして、自分の指と腕の力で動かせるものとして、十分に扱って欲しいのです。はじめからクッキーの抜き型や型押しを与える必要もありません。教材の一つ一つについてそれが幼児の成長に望ましいものとして機能するように与えなければ、教師が「粘土の楽しさ」を経験させたいとねらっても、幼児は、「幼稚園の粘土は堅くて疲れる」ということを経験することになるのです。

何も考えず、本も読まず、去年のとおり繰り返す保育をやめて、ひとつひとつ吟味することが必要なのです。

遊びのレパートリーを増やす

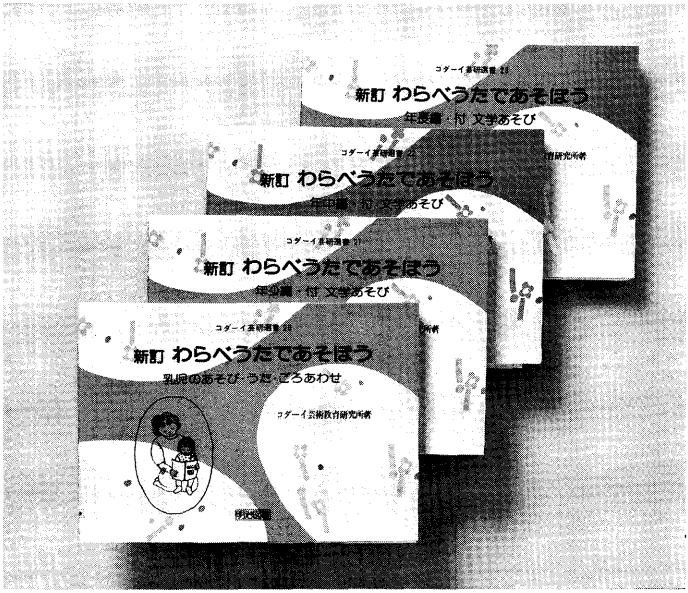
保育者が遊びの種類を沢山知っていて、幼児の成長や季節に合わせて自在に使いこなせることこそ、それは大切な人的環境であり、保育の技術です。

研究会のテーマに「自ら遊びや生活を作り出す幼児の育成」などが、取り上げられていますが、自ら遊びを作り出すようになるためには、それまでに存

分様々な遊びを経験して初めてできることです。これは、自立心が十分な依存経験を経て初めて育つことと同様です。そうすると特に二年保育の年少時代は保育者と一緒に沢山の遊びを経験することが大切なことになります。

大人は子どもと楽しく遊ぶことは容易なことではありません。保育実習に来た学生が珍しいもの好きの幼児に「遊ぼうよ」と言われて、手をつないだまでは良いのですが、どう遊んだらよいのかわからず呆然としている姿にしばしば出あいます。幼児と楽しく遊べることこそ保育のプロと申せましょう。

アメリカにいたころ、本屋さんに子どもと遊ぶHOW TOものの本が沢山出ていたことを思い出します。もちろん幼児を楽しく遊ばせたいということもあったでしょうが、ベビーシッターに子どもをあずける習慣があり、誰でもが子どもを楽しく遊ばせる必要があったこともうかがえます。



◀『新訂　わらべうたであそぼう』
（コダーイ芸研選書20～23　明治図書）
写真手前から、乳児・年少・年中・年長編

赤ちゃんのはり絵

用意するもの

1 古い雑誌(育児関係のもの)
2 ボール紙
3 のり

271

あそび方

これから赤ちゃんが生まれ、弟や妹ができる子どもにとって最適なあそびです。子どもといっしょに古い雑誌を見ながら　赤ちゃんやベビー用品、たとえば、おむつ、ゆりかご、おもちゃ、ベビー服などの絵を見つけましょう。切りぬいて、ボール紙の上にならべてのりづけし、はり絵をつくりましょう。できあがったら、子どもの目につくところにつるして、はり絵を見ながら、赤ちゃんのことについて話してください。

子どもと楽しくつきあう

365のあそび

2さいより

シーラ・エリッソン&ジュディス・グレイ 作　クロスロード 編

▲『こどもと楽しくつきあう365のあそび』(クロスロード)
上段は271番目のあそびの紹介　子どもの描いたイラストも楽しい

遊びを学ぶ

近頃は我が国でも沢山の遊びの本が出版され、それぞれ遊びのプロとされる方々が、講習会を開いて遊びの指導をしています。

福尾野歩さんの遊びの講習会はいつも満員で、二時間ほどの時間はアッという間に楽しく過ぎてしまいます。しかし、さて、習ってきたものを自分でやってみようとすると、とうてい野歩さんのように面白くはできません。単純なものほど難しく、どうしてあんなに面白かったのだろう、と夢からさめたシンデレラの洋服のように色さめて感じられます。遊びが単に方法が分かればできるものではなく、強烈なその人の持つ雰囲気やキャラクターが、場を支配していたことがわかります。しかし、遊ぶことがどんなに楽しいかを経験することは、やはり、明日からの保育に力を与えてくれます。

平凡な保育者が子どもと楽しく遊ぶために

先生が楽しい遊びを沢山知っていることはとても大切なことです。

わらべうたは優れた教材です。誠実に学ぶことによって誰でも身につけることのできる遊びです。

一九九一年に翻訳出版された『子どもと楽しくつきあう365のあそび』（シーラ・エリッソン&ジュディス・グレイ作　クロスロード編　クロスロード）はごく身近な生活のなかから、子どものレベルで遊べる楽しい遊びが三百六十五紹介されています。園芸、音楽、工作、ゲーム、自然、食べもの、ダンス……十三の分野に渡る楽しい遊びのアイディアはきっと幼児の生活を豊かに、楽しいものにしてくれると思います。

遊びこそ保育の大切な技術なのです。

（洗足学園短期大学）

あんよ、いたいの？

並木　美砂子

六年ぶりのアジアサイだ。やっと会いに来ることができた。ここは、多摩動物園のなかほど、アジアゾーンの一角だ。いっしょに手をつないでやってきた娘は、まだ二歳。連れてくるのに精いっぱいだったが、サイは彼女のお気に召すだろうか。

ゲートをくぐりゆっくり歩いて十五分ほど、やっとサイに会える。「久しぶりだね」心の中で挨拶した。あの時いたメスのサイは、すでに天国に召されていた。残されたオスは寝室の中だった。運動場には「捻挫のためしばらくお部屋にいます」と書かれた小さな看板。

「ふうん、今日はお部屋なんだって」看板を見たお客さんが、つまらなそうにちょっと部屋を覗いては立ち去っていく。娘を抱き上げて、部屋がよく見えるような場所に行った。

通路のガラス窓の向こうに、彼は立っていた。その観客通路とサイとの間には太い太い鉄の棒（つまり、

檻）があるけれど、棒と棒の間が二〇センチもあいているので、よく見える。ちょうど飼育係が部屋を洗い流しているところだった。

「あんよ、いたいいたいなんだって。だからね……」

私は、娘にどうしてプールのある広い運動場にサイがいないかを説明しようとしたが、どうやらその必要はなかったらしい。というより、彼女にとって「サイ」が自分からわずか二メートルあまりのところに「いる」ことが、今問題なのだった。

彼女は微動だにしない。文字どおり目を「まんまるく」してサイに見入っている。手はぎゅうっと握りしめたまま、視線は顔に向けられていた。それを知って私も彼にじっくり見入ることにした。

「鎧」と称されるその皮膚の深いひだは、何とも例えようのない、渋い「土色」だった。草を噛みしめる度に、体はかすかに揺れ、ひだの折れ具合が微妙に変わり、普段は見えない柔らかそうな肌色の皮膚が、ひだの内側に見えかくれする。固い金属の鎧などとは大違い。弾力に富んだ、厚みのあるれっきとした皮膚なのだった。

サイらしさを象徴するそのツノは、固くしまって頭の方に湾曲し、いかにも重そうである。それを支える首から肩にかけての筋肉は「鎧」の中にしっかりとしまわれているものの、草を噛みしめると、はずむようにリズミカルな動きをみせている。

ツノの組成は、どちらかというと「皮膚」ではなく、体毛やツメの成分に近いそうだ。よく見ると、縦に何千もの糸のような組織が互いにしっかりくっついて「ツノ」の形を作っているのがわかる。こうした特殊なツノはもちろんサイ特有のものである。

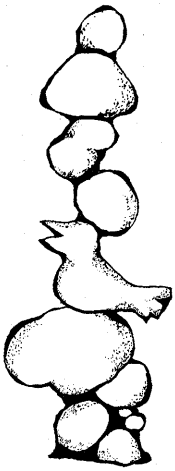
私は娘とともにしばらくこのサイから目を離すことはできなかった。

やがて、室内の清掃

を終えた担当の飼育係が、彼に何かやさしく声をかけながら、サイのすぐ横にやって来た。それがあまりに自然な光景だったので、まるで、これからお乳を搾るために雌牛の脇に腰を下ろす農夫のように見えた。

よく、「野生じゃない動物は本物じゃない」とか、「動物園の動物は不自然でかわいそう」などと言う人はいるけれど、私は、サイやカバなど大きな動物に、人間が接近し接触できるのは、ひとつの「技術」として見るべきだと思う。そういう関係を動物との間に持つことができるのは、ひとつの文化だと。

その飼育係は手に薬を持っていた。クリーム状の薬をチューブから出して、左後ろ脚に塗るのだった。まるで造作のない自然な光景だった。みとれてしまった、としか言いようがない。だまって、サイは脚に塗らせている。その間、飼育係はずっと優しく声をかけ続けていた。その内容は聞き取れなかったが、どんなに観客が近くですっとんきょうな声を上げても、興奮もせず、じっと立って薬を塗らせていたのは、その飼育係の声やしぐさのおかげに違いない。



「あんよ、いたいの？」娘はサイに話しかけている。

サイの捻挫のおかげ、と言っては申し訳ないが、実際、こんなにも間近でサイの姿に接することができた

のは、確かにこの捻挫の故である。
動物園で飼育していれば、こうしたアクシデントもたまにはあるだろう。そして、時には飼育係と動物との絶妙な信頼関係をかいま見ることもできる。
もちろん、当の動物はこんな楽しみ方を許してはくれまいが……（ごめんなさい）。

さて、薬を塗られたサイは、相変わらず黙々と草の山に顔を埋めてそれを食べている。器用に口先を、つまり唇の部分を細く前に突き出して、山を少しずつ崩していく。山はだんだん嵩を減らす。むしゃむしゃというか、ごそごそというか。草を唇でかき分ける音、奥歯で噛みしめる音、そして時たま聞こえる鼻息、それらがコンクリートで被われた部屋に響く。まさに圧巻だ。
ゾウが、その長い鼻で草を巻きとって口に運ぶのは、道具を使って食べ物を口にしているように見えるが、それに比べ、サイが草の山に口を直接つけて一心に食べ続ける様子は、どことなく哀愁を帯びている。
それはおそらく、生きることと食べることとが、イコールの記号で結ばれている「生命」の切なさを実感させるからに違いない。人間の「生」も、多かれ少なかれこうした地球上の生き物たちと共通の運命を持っているからに違いない。理屈抜きでそれを感じる。

となりには同じ大きさの部屋が並んでいた。メスのサイのものだったことは容易に察しがつく。ぽっかりと空いた空間。何十年もそこに住んでいたことをうかがわせる、表面の少しはげたコンクリート。壁にはツノや体をこすりつけたのであろう、汚れが黒光りしている。
どんな思いで飼育係はメスの死を受け入れたのだろうか。
同じように、はげた床や汚れた壁は、そのメスに長い間連れ添ってきたこのオスのサイにも、そんなに遠くない将来、同じ日が訪れることを思わせる。

なにせ、数百キロはある巨体である。太い四本の脚がそれを支えているのだ。たとえ一本でも具合が悪いと、他の脚にも影響し、不自然な姿勢をとらざるをえないだろう。ちょっとした弾みにつまずいたり、起きあがれなくなってしまったらどうしよう。血流障害を起こしやしないだろうか……次々に不安がよぎる。

この二年後、私はアジアサイの担当の飼育係にお会いする機会を持った。オスは、足を痛めて以来健康状態がすぐれず、亡くなったそうだ。その飼育係のかたは、動物園の雑誌にかつてこんなことを書いていた。

「高齢のサイたちにも、なんとか豊かな飼育環境を提供し続けたい。動物園だからこそそれができるし、しなければならない」と。彼は私が尊敬する飼育係のひとりである。

アジアサイは日本の動物園には数えるほどしかいない。もちろん世界中の動物園でも飼育数が少ない。地球上で絶滅の危機を迎えている種類のひとつだ。アフリカのサイたちも同じ境遇にある。そんな遠い地で生きている動物たちからのメッセージも、目の前の動物たちから受けとめていかなければと思う。

「あんよ、いたいいたいしたの？」娘は今度は自分の足をさすっている。飼育係が薬を塗るような手つきで。そして最後にこう言った。「いたいのいたいの、とんでけー」私も同じ気持ちだった。どこかにとんでいってくれれば……。

サイは変わらず草を食べ続けている。

（千葉市動物公園）

『十里霧中』番外編

――イギリスの畑の横に暮らして――

豊田　一秀

今回は子どもたちの学校の事から少し離れて、イギリスの田舎を紹介すべく、我が借り家の周りについて話を進めてみたい。

今、我々が住んでいるサリーという所はロンドンの南西部にある地域で、ロンドンに通う人たちも住む、比較的豊かな緑の多い田園地帯である。私たちが見つけた借り家は狭いながら庭もある一軒家で、何よりも気に入ったことは、家の前が見渡すかぎりの麦畑だったことである。八月の始め、黄金色に輝く畑は乾いた風にやさしく波打ち、朝に夕に私を楽しませてくれた。

ある日、コンバインがやって来ると、一日にして麦畑はスポーツ刈りの畑となった。すっきりした畑に、落ち穂を食べに来るのだろうか、多くの鳥たちがやって来て、また私たちを喜ばせてくれた。十月になると、今度はトラクターがやって来て、何やら種をまい

て行った。一体、次は何の畑になるのかと毎日家族で興味津々見ていると、すぐに畑一面に可愛い新芽が生えてきた。葉の形から察するに、どうもカブか大根のようだ。芽は日に日に大きくなり、かわいい根も脹らみ始めた。一月になると、それは立派な大きさになり、形から察してカブと確信された。しかも、土から上の日に当たっている部分は赤紫色をしていてなんともおいしそうだ。妻と私は青首大根ならぬ赤首カブと勝手に名付けて、まるで自分たちが種を蒔いたような気持ちになって成長を楽しみにしていた。

ある午後、私たちはついに誘惑に負けてしまったのだ。いつものように二人して散歩をしている時にふと畑を見ると、お手本のようにきれいな形をした一株と目が合ってしまった。しかも、それは少々土から出てしまっていて、そのままでは枯れてしまいそうである。私たちはうなずき合うと、家に連れて帰ることにした。日本的なものに飢えていた私たちは、薄切りにして塩もみで食べることにした。ワクワクしながら食卓を囲んだ我々であったが、それは香りこそ良かったものの、味の方は水気がなく「す」が入ったようである。私たちは少々落胆したものの、懐かしさもあって全部食べてしまった。少々後ろめたい後味が残った。

味を知ってしまった後、少し覚めた目で畑を見るようになった私たちであったが、二月にもなると、今度は、この見渡す限りのカブを一体どのようにして収穫するのかという点に私たちの興味が注がれた。それに、町の八百屋の店頭にはまだその種のカブが出回っている様子がない。

そんなことを気にしながら、ある日、大学から帰って来ると大変な事が起こっていた。何と畑一杯に羊の群が入っているのである。そして、モリモリとカブを食べている。

一大事！ 農家の人に知らせなくてはと思った後、ハッと私は悟った。そもそもこの農地は酪農家の土地なのだ、もしや、あの赤首カブは人間用ではなかったのかも……。

▲部屋から見た畑 「大切な カブが……」

がっくりきた気持ちで畑に近付いてみると、羊たちは「これですよ！」といった顔で、平然とうまそうにカブをはんでいる。そして、辺りには羊の糞が新しく蒔かれた種のように点々としている……やれやれ。

考えてみれば、これがきっと栄養となって次の作物が育ち、そして一年、一年が廻っていくのだろう、今までもずっとそうであったように。初めて畑の廻りというものを間近で見た私は、少しばかり悟りが開けたような気持ちでグレーの空を見あげた。

それにしても、見渡せば上半分しか食べていないカブが、辺り一面に食い散らかしてある。なんていうこった、「オイ！ 羊たち！ 俺たちはナ、全部きれいに食べたんだゾ！」。

（元お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）

編集後記

今月から、巻頭言を「二十一世紀にむけて幼児教育を考える」というテーマで書いていただいています。これからの巻頭言に、どうぞご期待ください。

＊

昨秋、表紙を描いていただいている、いわむらかずお先生を益子にお訪ねしました。益子は、私の子ども時代が思い出されるような懐かしさが感じられるところでした。先生のアトリエは「十四ひきのねずみ」があちらこちらから顔を出しそうな雑木林の中にありました。

そのアトリエで、今年の表紙をいただきました。先生から、この動物たちが着ているのが上着だけであること、タンポポには一年中咲いているものもあることなどをお聞きして、『幼児の教育』の表紙であることへのご配慮を、とてもうれしく思いました。

つぎの日、お宅で見せていただいた『トガリ山のぼうけん』が読みたくて図書館で探してみました。先生のお話では、今までにはない〝小学校低学年向け〟〝連載〟〝長編〟絵本ということでしたが、その意図に反して、児童書のコーナーに並べられていました。

それらの本を借りて来たその日から、我が家はにわかに「トガリ山」づいて、その中にでてくる日本語のおもしろさを楽しんでいます。今は、子どもとともに五月に第六巻がでるのを楽しみにしています。　（A）

幼児の教育

第九十五巻　第四号
（一九九六年四月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成八年四月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

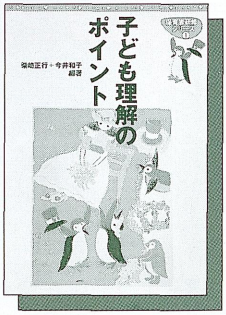
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

保育者研修シリーズ

●園内研修資料として最適
●保育の見直しに役立つ

新しい保育の考え方による保育技術の実践書で、中堅保育者としてこれだけは身につけておきたい保育方法が分かり、保育全体が見通せるようになる。中堅保育者の保育の見直しにも好適。
日常、保育現場で起こる疑問や迷いを、子ども理解、子どもの生活と計画、援助、環境など四種類に分け、それぞれに実践例をつけて問題点に答えたもの。子どもと保育の基本がよく分かる。

① 子ども理解のポイント

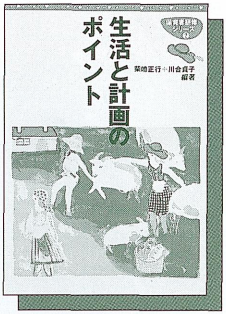


保育は子どもをよく知ることから始まる。子どもの生活の理解、育ち合いの理解、発達の理解、関係の理解などに視点を当て、ベテラン保育者が実践事例をそえて子ども理解のポイントを示したもの。

柴崎正行＋今井和子　編著

B５判・128頁・定価2,000円（本体1,942円）

② 生活と計画のポイント

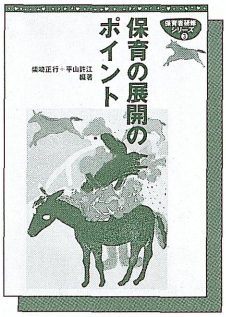


保育計画の作成、計画と実践の見直しをはじめ、教育課程の編成までを書きやすい記録づくり、使いやすい計画づくりに焦点をあてて生活に合わせた計画づくりを解説したもの。子ども中心の保育への見直しに役立つ本。

柴崎正行＋川合貞子　編著

B５判・136頁・定価2,000円（本体1,942円）

③ 保育の展開のポイント

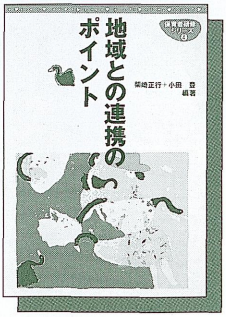


保育実践でむずかしいとされている援助の仕方やタイミングについて解説したもので、子どもの気づきや工夫、発想を生かした展開を中心に園生活の流れにそった展開方法をまとめたもの。子どもをいきいきと生活させる保育の見直しに役立つ。

柴崎正行＋平山許江　編著

B５判・168頁・定価2,000円（本体1,942円）

④ 地域との連携のポイント



子どもの成長は環境の生かし方によって大きく左右される。保護者との信頼関係、保護者の要望と悩み、地域との信頼関係、地域の行事、環境、人材の生かし方、保育者間の連携など、地域に開かれた園づくりのポイントが分かる本。

柴崎正行＋小田　豊　編著

B５判・144頁・定価2,000円（本体1,942円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

年齢別保育実践シリーズ

小川博久　責任編集　全５巻

Ａ５判　１～４巻 264頁　５巻 288頁

全３巻セット　（第３巻～第５巻）　セット定価 6,000円（本体5,826円）

全５巻セット　（第１巻～第５巻）　セット定価10,000円（本体9,710円）

新教育要領が望んでいる自主性を育てる
保育に必要な援助の仕方と
子どもを見る目を養う保育実践書。

①0～1歳児の遊びが育つ

小川清実　編　　定価2,000円（本体1,942円）

②2歳児の遊びが育つ

野本茂夫　編　　定価2,000円（本体1,942円）

③3歳児の遊びが育つ

平山許江　編　　定価2,000円（本体1,942円）

④4～5歳児の遊びが育つ－遊びの魅力－

河邊貴子・戸田雅美　編　　定価2,000円（本体1,942円）

⑤4～5歳児の遊びが育つ－遊びと保育者－

河邊貴子・戸田雅美　編　　定価2,000円（本体1,942円）

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。